

自己組織人の行動選択 — ポスト行動科学の視座から —

The Behavioral Decision Schema of a Self-organizing Person

— from the View Point of Post Behavioral Science

嘉味田 朝 功*

Choko KAMITA

目 次

まえがき

I. 行動選択スキーマ

1. 組織人対自己組織人
2. 認知読取り図
3. 行動選択スキーマと暗黙知

II. 自己組織化実践のフェイズとステップ

1. 組織化のパターン——目標設定と手段選択の〈言語〉次元での統合
2. 組織化の活動——感覚と意思の〈意識〉次元での統合

3. パタンの実現——意味と存在の〈身体〉次元での統合

III. 創造性と異常行動（別稿）

1. ストレス状況での行動選択
2. 創造性と生の円環運動
3. 生の円環運動の停滞と異常行動

まえがき

本稿は、「ポスト行動科学」という大テーマの一部分である。本論に入る前に、全体の中の位置づけについて述べておく。

今、日本では、〈生産〉主導型〈経済〉から、

* 経営情報学科—行動科学

〈生活〉主導型〈社会〉へと構造転換が行われつつある。〈物〉の豊かさから〈心〉の豊かさへ、と言われている。この流れの方向は、科学・技術の世界の変化とも呼応する。すなわち、〈物質・エネルギー〉主導型から、〈情報・意味〉主導型への転換である。DNAとICがその象徴である。

この進展によって、今や人類は、飢えと病の圧力から、人類全体を解放できるだけの〈生産力〉と〈技術知識〉を手にした。人類誕生の時代以来の夢が実現したのである。〈言葉〉を操り、〈組織〉を創り、〈協働システム〉を機能させる努力が成功した結果である。

エジプトの王は、自らの〈夢〉をピラミッドの中に閉じ込めて、永遠の世界へと到達した。これからは、われわれ〈1人1人〉も、自身の王国の王となって、自らの夢をピラミッドの中に閉じ込めるのである。とてつもなくでかい夢。ささやかな夢。夢の中身は人それぞれでよい。大事なことは、①〈自分〉が選択するということ。もちろん、依然として大事なもう1つのことは、②互に〈協力〉し合って、夢を閉じ込める容器を作り出すということ。〈シャボン玉〉のように、途中でハジケて消えてしまうことのないように。〈組織人〉の前に自己がついて、

〈自己組織人〉の時代が到来した、と考える。もう、誰も飢えの心配はないのだ!! (少なくとも先進国では。そして行動選択さえ誤らなければ。) こうしてわれわれは今、人類史のターニング・ポイントに立ち会っている、と言える。

変化の核心はこんな風に要約できる。

1. 「情報制御革命の進展」は、「柔軟性のある〈生産能力〉の飛躍的な向上」をもたらした。
2. 「通信技術革命の進展」は、「〈情報流通〉の大規模化、即時化」をもたらした。
3. 「通信網・交通網で結ばれた地球全域の緊密化」は、「異〈文化〉間、新旧文化間の相剋」をもたらしている。
4. 「物質的生活水準の高度化」は、「欠乏時代の〈思考枠組み〉のひずみ」をもたらしている。

こうした状況で、“物質・エネルギー”、“組織人”の時代に確立された知識内容そのままに縛られてはいけぬ。まず、①〈発想の仕方〉そのものを、“情報・意味”、“自己組織人”の時代に適合するように変えなくてはならない。次に、②自己点検を行って、④捨てるべきものと⑤残すべきもの、③変えるべきものと①新たに取り入れるべきものを明確にする。そして、③、⑤③④を体系化して、新たな知識内容に転換していかななくてはならない。

情報化社会の特徴は、①多様性、②同時性、③選択性、といわれる。新しい知識体系は、これらの特徴に対応できるものでなくてはならない。そこで、探索の方向として、次の発想法にヒントを求めた。

1. 編集工学——情報の①手続性（記号連鎖）と②物語性（意味創造）の統合方法。
2. 現代システム論の焦点——①自己組織性、②全体性、③主客の統合、④階層性、⑤虚構と現実。
3. まんだら——現実と超越（精神世界）を橋渡りする東洋思想の集大成。
4. 記号論——人間の外界認識とその相互交換を可能にする媒体としての記号の特質。

こうして、情報化社会に通用する行動科学の鍵概念を求めて、次のような変遷をたどった。

- ①人間関係論再考⁽¹⁾→②行動記号論⁽²⁾→
③ホロンマップ⁽³⁾→④自己転換装置⁽⁴⁾→
⑤自己組織化スキーマ

本稿は、⑤の自己組織化スキーマをベースに、自己組織人が、どのような行動選択をするか、仮説的に推論を展開したものである。

なお、ポスト行動科学全体の具体的な展開に当たっては、次の人たちの知見を編集している。

- ・社会学者、今田高俊の「自己組織性」⁽⁵⁾
- ・言語学者、ソシュールの「ラング・パロール・ランガージュ」⁽⁶⁾
- ・精神分析医、ラカンの「無意識の言語」⁽⁷⁾
- ・論理学者、パースの「アブダクション」⁽⁸⁾
- ・科学哲学者、ポラニーの「暗黙知」⁽⁹⁾
- ・哲学者、西田幾多郎の「場所的論理」⁽¹⁰⁾

最後に、ポスト行動科学の全体構成を次のようにイメージしている。

I. 個人の自己組織化

1. 自己組織人の生き方
2. 自己組織人の行動選択
3. 差異のコミュニケーション

II. 集団の自己組織化

4. 意味共有のネットワークワーキング
5. 生活創造者の理論
6. 事業体の行動選択

III. 社会の自己組織化

7. 国家の行動選択
8. 異文化間の摩擦と協働
9. 役割行動とリーダーシップ

総合的な理論展開は、5.の「生活創造者の理論」のセクションで行う予定である。本稿では2.の「自己組織人の行動選択スキーマ」について、事例をあげて、アウトラインを記述する。

I. 行動選択スキーマ

1. 組織人対自己組織人

A. 青山さんの事例

休日出勤の朝（妻と夫の会話）

「車のライセンス取ったので迎えに行こうか？
会社の前まで。」

「会社の前はだめだよ。Aビルの西南の角にし

てよ。11時半に。」

「あそこは車の量も多いし、信号も複雑だから、別の所ない？」

「いいじゃない、あそこで。仕事に行く製版所も近いし。行くよ。」

仕事を終わりAビル西南角にて1時間半イライラして待つ。やっと来る。車の窓から顔を出して

「早く早くッ。こっちに来て!! 早く乗ってよ、後から車が来るから。」

ふてくされて車に乗る。

「どこへ行っていたんだッ。1時間半も待たせて。」

「どこに居たのッ。ちっとも見つからなかったわ。この車の多い所、止まれやしない。この辺を4回もぐるぐる回ったわよ。」

「もういいよ、迎えに来るの!! こんなに待たされるのかなわん。見せものじゃないんだから。」

「道も混んでいたし、少しは遅れたけど、あなたが角に居ないからよッ」

「チャンと角で待っていたよ。1回は見向きもしないで通り過ぎたじゃないか。」

「チャンと見てたわよ。居なかったじゃない。車も多いし、どんどん流れていくし。」

「おいッ!! 赤だよ。止まれよ。」

「知ってるわヨ!! まだ黄だったわよッ。ライセンスないくせに。」

「信号無視だ!!」

.....

「食事どうする？」

ふてくされて

「もう帰ろ。」

B. 山川さんの事例

休日出勤の前の夜

「おかげで、車のライセンス取れたわ。」

「そう、よかったね。」

「明日の休日出勤、迎えに行こうか。」

「それは有難いけど、大丈夫？」

「まだ自信はないけど、用心すれば大丈夫よ。」

休日の昼頃なら、会社の前、わりと車止めやす

いと思うわ。」

「会社の前はだめだよ。」

「あら、妻に迎えに来てもらうの、誰かに見られたら、恥ずかしいの？」

「ま、そんなとこ。」

「そうかしら。気にすることないと思うけどなあ。じゃ、どこがいい？」

「Aビルの西南の角にしてよ。11時半に。」

「あそこだめよ。車の量も多いし、信号も複雑だから。別の所ない？」

「時間があるんだから、来る前に2、3回回ってみたら、自信つくんじゃない？」

「それはやってみるつもりだけど、明日は一寸無理と思う。あそこはもっと慣れてからにして。どこか別の所ない？」

「そうだなあ、仕事に行く製版所からも遠くなくて、車が少なそうな所といえど……。Bビルの角はどうか？」

「そうね、あそこならいいわ。」

「帰り道、久しぶりにCに寄って、食事でもするか。」

「わ、嬉しい。わたし、2、3回練習しておくから。11時半でいいのね。」

「いいよ。」

「もしかして、一寸ぐらい遅れるかもしれないけど、待っててね。」

「うん、別に急ぐ用事はないんだから、十分気をつけて。安全第一だよ。」

「ええ、気をつけるわ。じゃ明日ね。」

2. 認知読取り図

青山さんは、本稿でいう「組織人」に属する。彼の「ココロ」に、事態がどう映っていたのだろうか。本人が事後に、「コトバ」で書き記した上の原文を手がかりに、「認知読取りスキーマ」⁽¹¹⁾を使って、解釈してみよう。

彼は、妻の申し出を、文字通りに、「休日出勤の車での出迎え」とみている。(①状況の認知)それ以上でもなく、それ以下でもない。もともと彼は、「自分が重要だと判断した事以外は、神経をわずらわすのは好まない」タイプのような。(②自我像)「ものごとは合理的に進めるべ

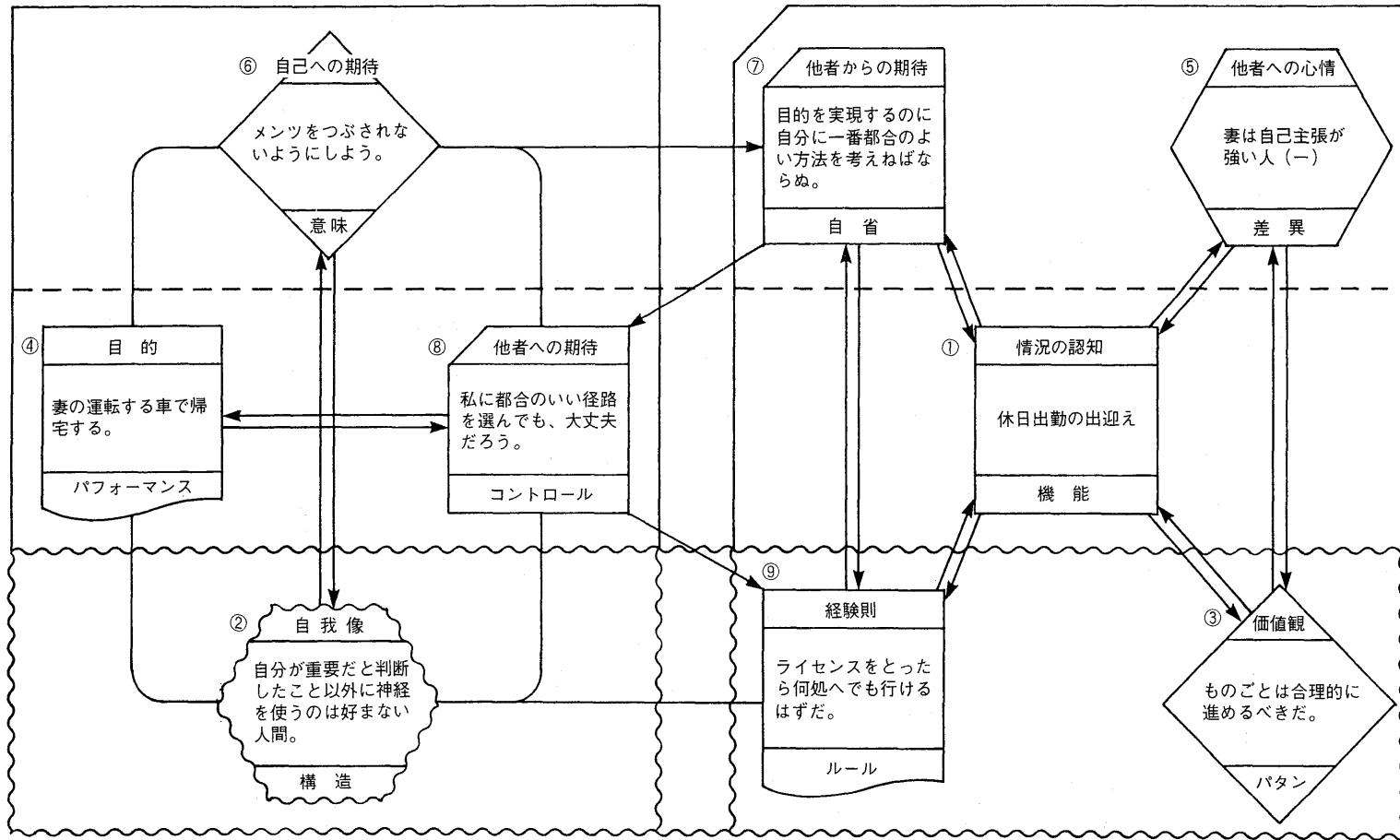


図1 青山さんの認知読取り図

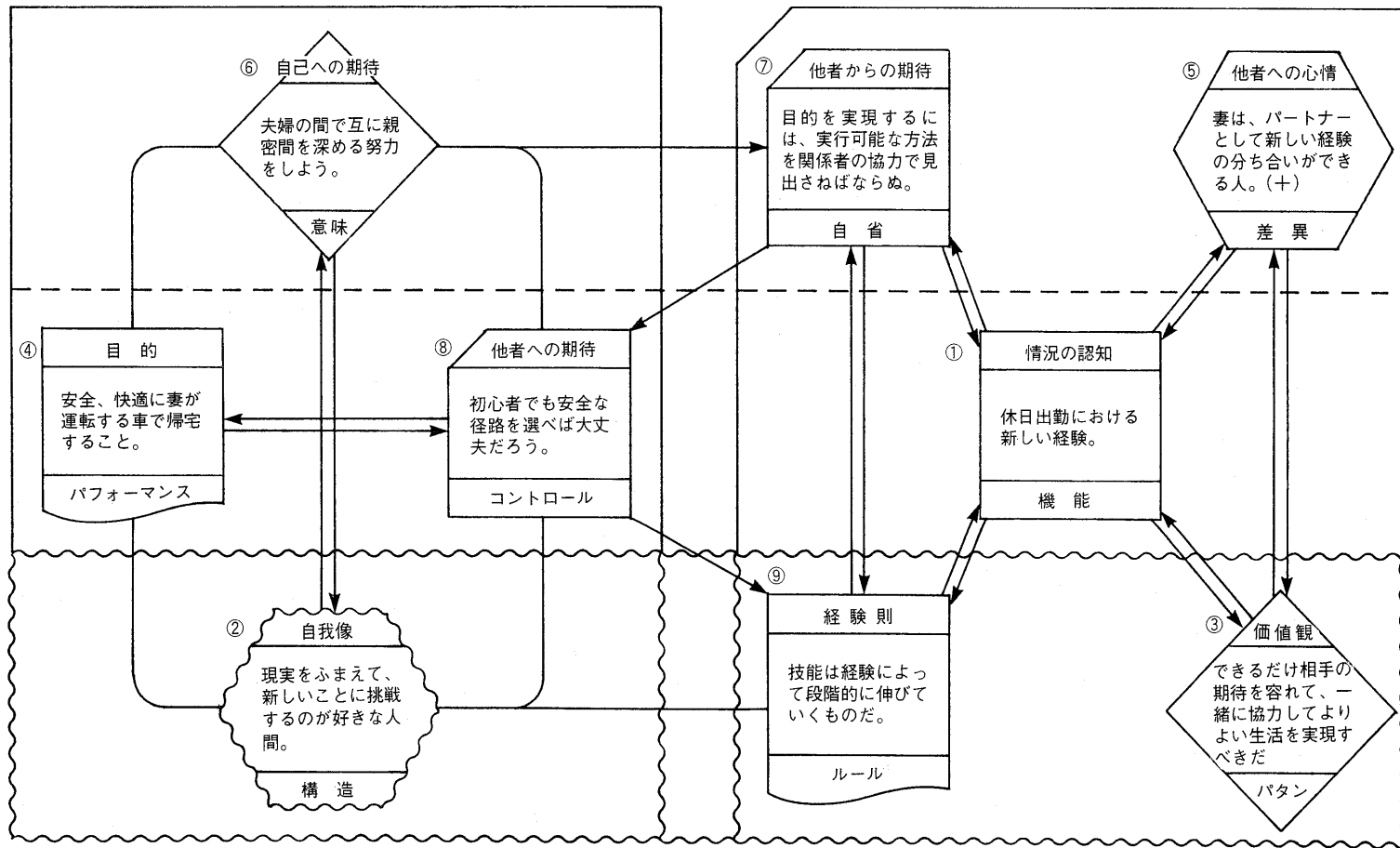


図2 山川さんの認知読取り図

きだ」という考え (③価値観) から、妻がライセンスを取ったのだから、「妻の運転する車で帰宅する」のは理にかなっている。(④目的)

だが、「自己主張の強い妻」に対しては、やや否定的な感情を持っているので (⑤他者への心情)、全面的に妻の言いなりになったのでは、メンツがつぶれる (⑥自己への期待)。それに会社の前では、会社の人に見られるかもしれない。これもメンツをつぶすことにつながる。

青山さんは、「目的を実現するのに、自分に一番都合のよい方法を考えるのは、当然のことと考える (⑦他者からの期待)」。そして、彼は「都合のいい経路を選ぶ」ことにする (⑧他者への期待)。「ライセンスを取ったのだから、何処へでも行けるはずだ。」との考えの下に。(⑨経験則)、自分自身、運転の経験のない青山さんは、初心者がどれほど神経を使うかは、知る由もない。

一方、山川さんは、本稿でいう「自己組織人」のタイプである。彼の認知読取り図を作ってみよう。

山川さんは、「休日出勤の妻の車での出迎え」を「我が家でこれまでになかった〈新しい経験〉」と受け取った (①状況の認知)。「現実にも十分配慮した上で、新しいことに挑戦するのが好きな人間」(②自我像) と思っているので、彼にとって、一寸したエキサイティングな出来事が今起ころうとしているわけである。

彼は常日頃から、「できるだけ相手の期待を容れて、一緒に協力してよりよい生活を実現すべきだ」(③価値観) と考えているので、妻の申し出から、「〈ライセンス取立て〉の妻の運転する車で、〈安全、快適〉に帰宅する」(④目的) という具体的な目標が意識に上ってくる。その妻に対しては、「パートナーとして〈新しい経験〉を〈分かち合う〉ことのできる人」(⑤他者への心情) として、好感をもっている。

山川さんの、場に臨む行動選択の方針は、「この機会を、夫婦間の親密感を深めるのに役立てよう。ただし、自分を犠牲にすることは避けよう」(⑤自己への期待) という考え方である。

この基本方針に沿って、「妻との協力によって、目的を確実に実現する方法を見出そう」(⑦他者からの期待) としている。山川さん自身、運転の経験はないが、どんな技能でも、経験によって段階的にしか伸びていかないものだ (⑨経験則) という考えがあるので、「初心者にとっても安全な経路を選ぶ」(⑧他者への期待) 努力をしている。

図1と図2は、青山さんと山川さんの認知読取り図である。

3. 行動選択スキーマと暗黙知

認知読取りスキーマは、当人の主観に立ち入って、各要素が論理的につながるように解釈するためのものである。一方、行動選択スキーマは、相手のとった行動と、周囲の客観的状況を関係づけて、第三者に納得のいくような論理的説明を推論するためのものである。2つ合わせて検討することによって、当人の問題点や行動改善の方向が示唆される。

事例B、自己組織人山川氏の行動選択の特徴を、スキーマに沿って抽出してみよう。彼にとって〈人生〉とは、日常の1コマ1コマの体験の〈意味〉(⑥知覚) を、意識化して捉えること (表現=テキスト) によって、自らの努力で充実させていくべきものと考ええる。

この考えの下に彼は、常日頃、できるだけ新しい経験 (③パタン) を増やすことを〈期待〉しているので、妻の申し入れの「車での出迎え」を快感経験として受け取り (④パフォーマンス、解釈=感覚)、日常の習慣行動 (同一パタン) とは異なった、楽しいこと (⑤差異) を予感し (情感)、心地よい想像力=イメージネーションが活性化されるのである。

一方、予感した〈パフォーマンス〉を確実に成功させ、充実感を味わうために、〈手段〉選択 (⑦理論) には十分意を用いねばならぬことを自覚している (自省)。この事例では、成功・不成功の鍵を握っている (①機能) のは、ピックアップする場所の適切さ (文脈=認知) である、と認識している。交通システムに関係する、物理的・生理的・心理的諸要素を、先入観無し

に客観的・論理的に構造化して判断する必要がある。(②構造、主体—形態)。その時考慮すべき最も重要な要素は、運転者の能力がライセン

ス取りたてという事実である。(⑨能力、ルール)。話し合いを通じての探索の結果、両方に受け容れられるBビルの角を選択することにな

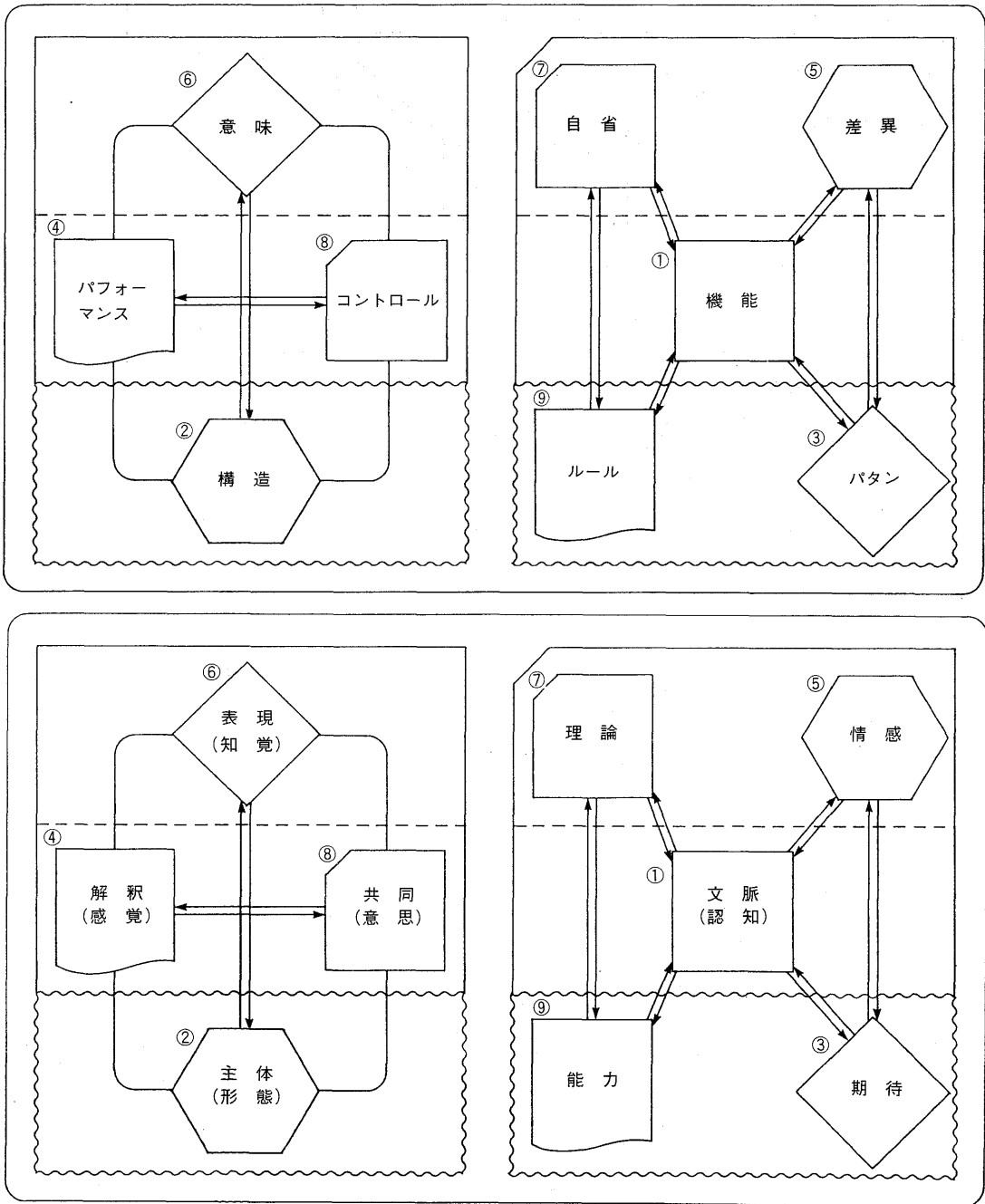


図3 行動選択の要素

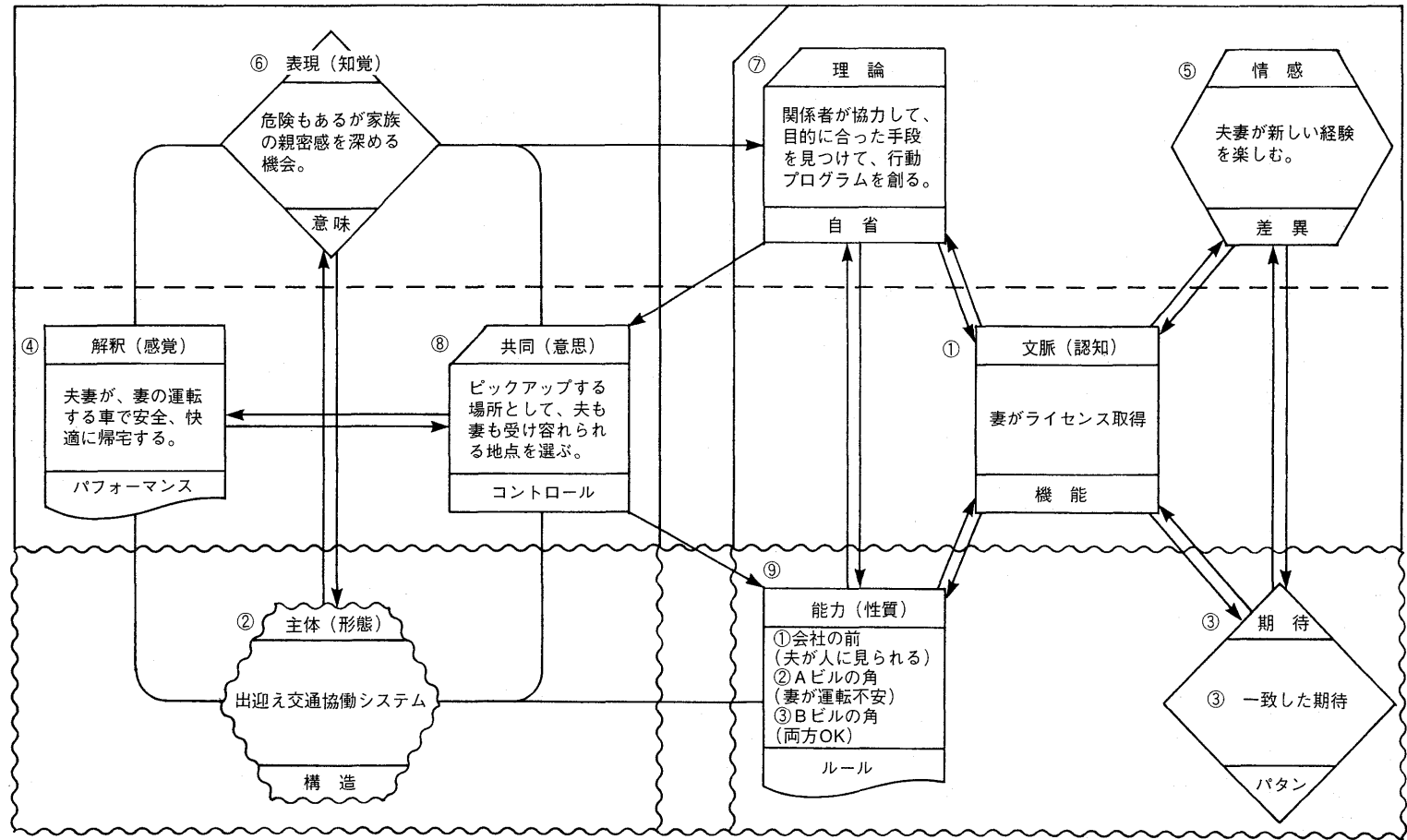


図4 山川さんの行動選択スキーマ

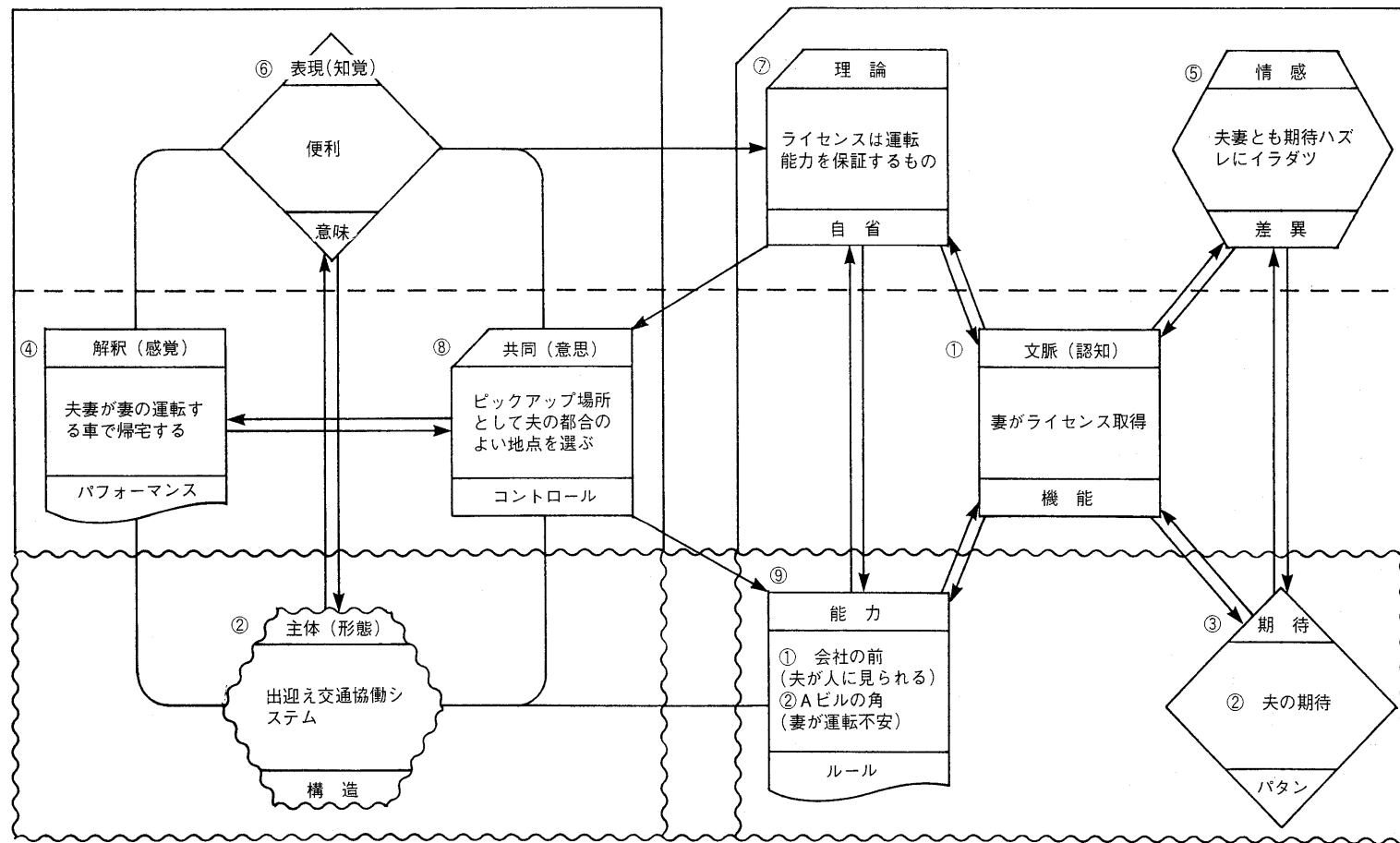


図5 青山さんの行動選択スキーマ

る（⑧コントロール、共同—意思）。上のことを図式化したのが、図3である。

これに対して、“組織人”の青山さんの行動選択の特徴はどうであろうか。

彼は、⑥の〈意味〉ということ余り意識していない。従って、日常生活において、⑤〈差異〉や⑦〈自省〉ということをとって意識することはない。（変わったことをして喜ぶということはない。）彼の意識の中心を占めているのは、①の〈機能〉である。ものごとが、思い通りにスムーズに進展していくことである。④の〈パフォーマンス〉については、〈何〉を求めれば、感覚的満足度がより高くなるかを考えるよりは、あることを、〈どの程度〉やれば十分かの基準を、合理的に判断しようとする。

設定した基準値達成のための手段（⑧コントロール）については、できるだけ既存のルール（⑨ルール）に従って、テキパキと効率的に片

付けるのをよしとする（⑧構造、③パタン）。同じ領域での能力向上には興味を示すが、異なる領域への能力の拡大には消極的である。

図4と図5は、2人の行動選択スキーマを図示したものである。

われわれは、日常の普通の行動選択は、暗黙知によって処理している。図6は、その全体像である。（詳細は別稿）なお、図7は、大脳レベルにおける情報処理モデル⁽¹¹⁾である。これにパースとソシュールの記号論を加え、論理レベル、心理レベル、生理レベル、社会システムレベルの異質・異次元の諸要素を分解して、タテに貫いて、まんだらの上に配置・図式化して、スキーマとしたのが図8である。

複雑な問題に対応するには、自らの中に複雑さを処理できる枠組みが必要である。まんだらは、宇宙の森羅万象を読み解く〈枠組み〉として創られている。未だ疑問点は多々残っているが、多元・多様な、私にとって不案内な諸理論

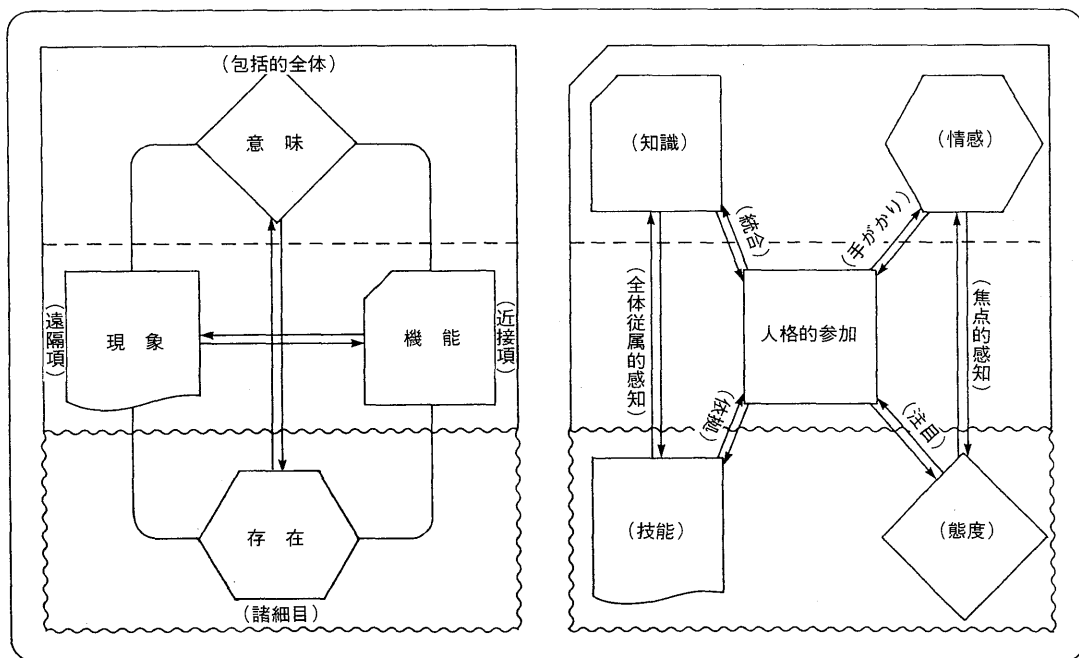


図6 暗黙知

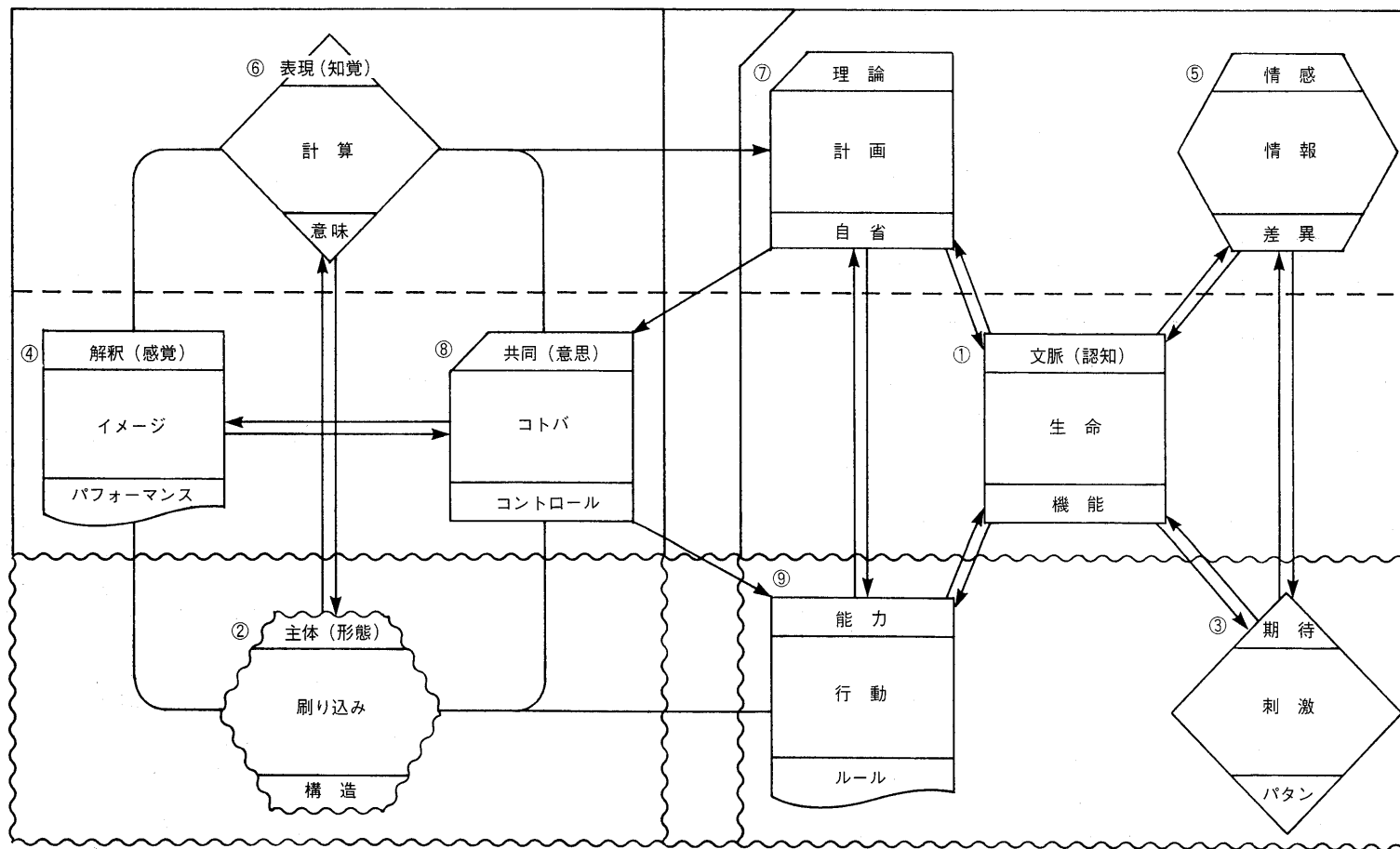
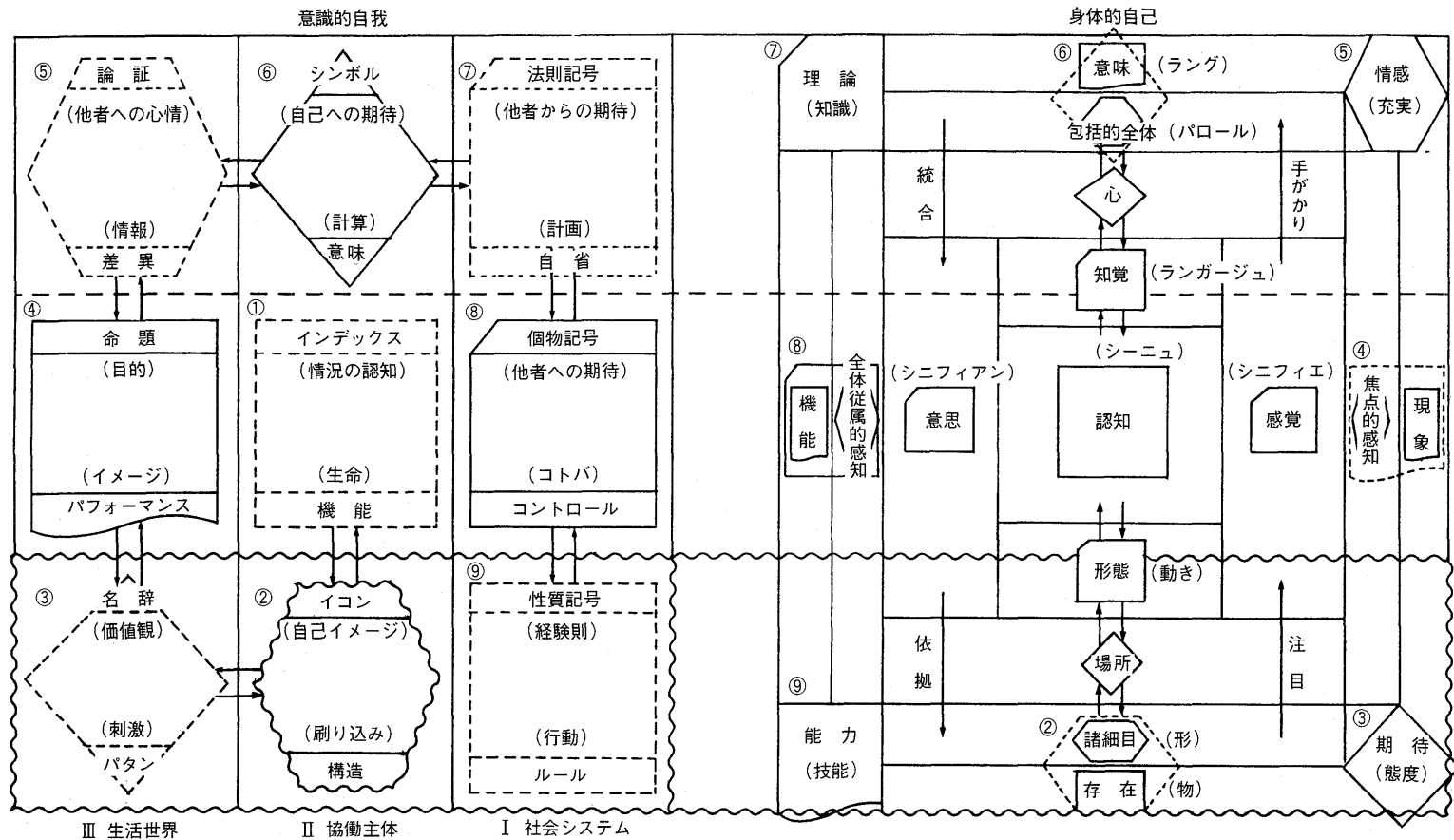


図7 人間脳モデル



を理解し、疑問点を整理し、自分なりの思考をめぐらす助けとなっている。

II. 自己組織化実践のフェイズとステップ

自己組織化の実践は、3つのフェイズからなる。①組織化のボタン、②組織化の活動、③ボタンの物質的実現である。これらのフェイズは、①心理・論理レベル、②生理レベル、③物理レベル、と順次次元が下がったものである。①認識し、②実践し、③存在せしめるのである。

1. 組織化のパタンづくり——目標設定と手段選択の〈言語〉次元での統合

自己組織化が成功するかどうかは、第1フェイズの、組織化のパターンづくりのよしあしにかかっている。組織化のパターンづくりには2つのステップが必要である。1つは、〈解釈〉によるパタンの提案。もう1つは、〈演繹〉によるその承認。(図9参照)

〈解釈〉とは、アブダクションとか、仮説設定とか発見的推論、仮説的推論などともいわれ

る。〈帰結〉と〈規則〉から〈事例〉を導き出す発想法である。山川氏の場合に当てはめてみると、〈帰結〉は、「初心者^③が安全にドライブする」ということで、これが④の目標設定となる。「初心者」というのは、「通常のドライバー」とは異なる、という点に注目する。そこで関連する〈規則〉として、「交通量が少なければ、初心者でも安全」という規則を立てる。こうして、経験的知識から、「Bビルの角」という〈事例〉が導き出される。これが⑧の手段選択ということになる。

だが、この〈解釈〉は、あくまでも提案者の〈主観〉的な認知である。〈演繹〉によって、正しさの度合いを確める必要がある。

この〈演繹〉とは、〈事例〉と〈規則〉から〈帰結〉を導き出す発想法である。山川さんの場合、「Bビルの角」〈事例〉ならば、他の人の経験〈規則〉に照らして、「初心者にも安全」〈帰結〉といえるかどうかである。ここでは、運転者である妻の〈主観〉とも合致して、〈共同主観〉が形成された。

ここで注意すべきことは、〈解釈〉も〈演繹〉も、経験にもとづく推論（予感）であるということである。つまり、暗黙知の働きなのである。暗黙知は〈論理〉でなく〈感覚〉の働きであるので、〈人格的参加〉が必要である。ポラニーの言葉を借りれば、主体が対象に〈潜入〉しなければならない。潜入した時、イマジネーション（想像力）が働くのである。青山さんの様に、自分の都合だけ考えているならば、イマジネーションは有効に働かない。慣習的・機械的に情報処理するだけである。したがって、当面するであろう現実の場の、正しいパターンを先取り（予感）することができない。

運転者の身になり代わって、混雑した交差点で人をピックアップする場面をアリアリと思ひ浮かべるのである。自分の身心、夫の身心、自分の車、道路、他の車、歩行者、信号、建物、これらすべての諸細目が、包括的全体として、1つの交通協働システムをなしているのである。

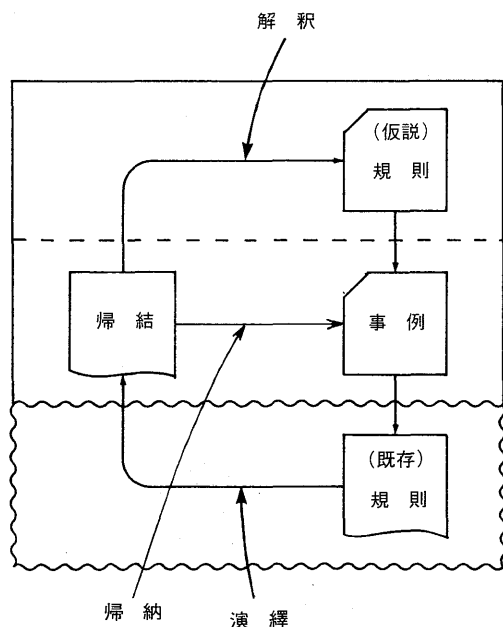


図9 解釈と演繹

システム内存在として、自分もその要素の1つをなしている、動き続けるシステムを、目の前に見ないで、想像力を働かせて、えがき出し、1枚の地図を作るのが、自己組織化の第1フェイズである。

2. 組織化の活動——感覚と意思の〈意識〉次元での統合

第2のフェイズは、組織化の活動である。了解したボタンに沿って、目標状態に到達すべく、手段を実行に移すのである。この間最後まで、当事者の共通感覚と共同意思が、〈意識〉レベルで統合されていなくてはいけない。フェイズⅠの記号活動が、現実状況を正しく反映していないと、そのままではボタンの物質的実現は不可能となる。そこで自己組織化の実践では、フェイズⅡをスムーズに運ぶために、フェイズⅠは十分慎重に行う。当事者全員からホンネ情報を引き出し、これを統合するのに時間をかける。また、意識は快感原則に従うので、目標に価値感情の基礎がないと、自己組織化は成り立たない。つまり、山川さんのように、もたらされる帰結（現象）が楽しそうな予感（感覚）がすれば、おおいに気を入れて行動しよう（意思）とする（機能）。だが、青山さんの様に、別に楽しそうな予感がなければ、とり立てて気を入れて行動しない。

行動段階では、予想したボタン通り進行していれば、そのフィードバック情報が深層意識を刺激し、楽しさを経験する。逆に、意図通りに進まないと、そのフィードバック情報が不快感を引き起こし、生理的変化が起こる。こうして、不機げんになり、イライラがつもの。

こうして、自己組織化は、青山さんのように、〈機能〉中心に物事を理づめで考える人にはむかない。楽しさや明さを求める感性人間に向く。もちろん、ただ、楽観的であればいいというわけではない。手段選択のツメもきちんとしておかなければならない。

3. ボタンの実現——意味と存在の〈身体〉次元での統合

自己組織化には、3つの選択が関与する。⁽¹²⁾

①内生的事前選択、②内生的事後選択、③外生的自然選択、である。①②は、主体の側からの選択で、③は客観によって選択されるわけである。それぞれ、①認識レベル＝組織化のレベル、②実践レベル＝組織化の活動、③存在レベル＝パタンの実現、で選択が行われる。成功経験も、失敗経験も、ともにしっかりと全身で受け止め、そこから意味を汲み取り、将来のために役立てるのである。

山川さんにとって人間〈存在〉とは、日常の1コマ1コマの体験の〈意味〉を、意識化して捉えることによって、自らの努力で中身を充実させていくべきものと考えている（図6参照）。あらゆる経験は意味づけされて〈身体〉全体の中に統合されて沈澱していく。そのトータルな意味体系が、自分という存在そのものに他ならない。そしてその存在は、他のあらゆる存在に開かれている。

青山さんの失敗の場合、「もういいよ、迎えに来るの!!…」といって、心を閉ざしてしまった。今回の〈事例〉が、どうして失敗という〈帰結〉を招いたのか、ふり返って、そこから経験的〈規則〉を見つけ出し、次の機会に生かす。…そういった発想には進まない。（ちなみに、〈事例〉と〈帰結〉から〈規則〉を導き出すのが、〈帰納〉法である。）そもそも、〈解釈〉、〈演繹〉をあいまいのまま活動に入ると（認識が甘い）、設計図なしで行動するようなもので、後になって、設計図のよしあしを検討することもできない。

ある行動を選択するということは、他の取り得たかもしれないあらゆる行動を排除することでもある。捨てた行動の中に、もっとよいものがあつたかもしれない。その意味で、これが唯一最善の行動選択ということは考えられない。人間、生きている間じゅう、絶えず、よりよいものをめざして、明るく歩み続けるのである。それが自己組織人の生き方といえる。

〔参考文献〕

- (1) 拙稿 『人間関係論再考—記号論・認知科

- 学・脳生理学をベースに』、経営情報学部論集、第3巻第1号、1987.
- (2) 拙稿 『行動記号論のデザインングー人間行動と情報・記号・意味』、経営情報学部論集、第4巻第1号、1988.
- (3) 拙稿 『ホロンマップー自己組織系としての人間現象解釈のための場所的意味図式』、産業経済研究所紀要、第1号、1991.
- (4) 拙稿 『自己組織型企業文化への転換』、経営情報学部論集、第6巻第1号、1991.
- (5) 今田高俊、「自己組織性ー社会理論の復活」、創文社、S. 63
- (6) 丸山圭三郎、「ソーシャルを読む」、岩波書店、1983.
- (7) 向井雅明、「ラカン対ラカン」、金剛出版、1988.
- (8) 米盛裕二、「パースの記号学」、頤草書房、1981.
- (9) M. ボラニー、「暗黙知の次元」、紀伊国屋書房、1980.
- (10) 中村雄二郎、「西田幾多郎」、岩波書店、1983.
- (11) 中山正和、「演繹・帰納 仮説設定ー新しい科学の方法」、産能大出版部、S. 54.
- (12) 吉田民人、「情報と自己組織性の理論」、東京大学出版会、1990.